

平成 30 年 2 月 13 日 (火)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 長塚圭史さん WS 構想の 2 日間—和歌・演劇・黄表紙—

1. 5 回目のご来館

2 月 13 日、長塚圭史さんが来館されました。2 日連続で来館されるため、その場で感じたことや、関心のあること、演劇のことなどを自由に話しながら、3 月のワークショップに向けて、ゆったりと構想を練る時間を持つこととなりました。

2. 和歌の面白さ

前回のご来館時、平安和歌を専門とする小山順子先生（当館准教授）に対してリクエストがありました。「和歌の、文学としての魅力を教えてください」。

長塚さんは以前、三好十郎作の戯曲『浮標（ぶい）』（1940 年初演）に感銘をうけ、演出に挑戦していらっしゃいます。『浮標』のハイライトのひとつに、主人公・五郎が、病床の妻・美緒に、全身全霊をかけて『万葉集』を読み聞かせるという場面があります。長塚氏によると、五郎は矛盾を抱えながら真理に至ろうとしており、人間として

シンプルになる必要がある。『万葉集』はそんな時に効くのだと考えられたそうです。

そこで、一般的に素朴とされる『万葉集』と異なり、様々なルールが定められている平安朝以降の和歌の魅力を知りたい、というリクエストでした。



小山先生は、実詠（歌人が実際に体験したことに基づき詠む歌）と題詠（与えられたお題に即して詠む歌）とがあるが、現存している和歌の 8 割が題詠であり、題詠歌の味わい方を知らないのは勿体ない！との思いから、題詠歌の面白さについてレクチャーしてくださいました。

たとえば、『百人一首』の有名な和歌のひとつ「しのぶれど色に出でにけり我が恋は 物や思ふと人のとふまで（平兼盛）」は、歌合¹

¹ 左右にわかれて、出された題に即した歌を詠み合い、優劣を判定

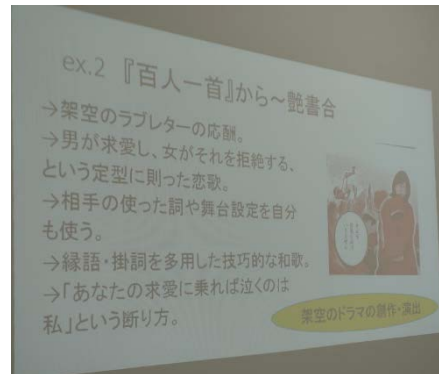
するゲーム。

平成 30 年 2 月 13 日 (火)

で詠まれた題詠歌です。平兼盛自身がこの時そんな恋をしていたとは限らないのですが、「恋心を抱き始め、我が胸の内一つに秘めていたのに、いつしか人に気取られる様になってしまい、噂を恐れている」という状況は、誰もが（現代人も含め）一度は体験したことがあるのではないのでしょうか。このように、自分が抱いている感情を、先人の作品が的確に表現してくれており、共感できるというのが魅力の一つなのです。

ほかにも、「31 文字という限定された言葉の中で創り出されるドラマを楽しむことができる」「“音声”で捉えることを前提とする謎かけや言葉遊びを楽しむことができる」といった魅力を、様々な例を交えて話してくださいました。

長塚さんは、ルール(フォーマット)が定まっていることによって、誰もが安心してその中で遊ぶことができる和歌に、実情を重視する現代短歌とは違う魅力を覚えられたようです。特に、万人共通の価値観や、美しさ、面白さの基準というものが無くなってきている現代において、ご自身で戯曲の創作をされる時の苦労を振り返り、「何が美しいかという価値が定まっているのはとても魅力的に感じる」



と話しておられました。

フォーマットがあるということは、繰り返されることに耐えられるということでもあります。作者自身のエピソードがなく、その歌だけが残っている題詠歌は、長年かけて培われてきた美意識や、その歌そのものの本当の価値を味わうことができるのです。

定まった価値の大切さと、新しい価値を生み出す難しさ、どちらについても考えさせられる時間でした。

3、黄表紙と演劇

庶民的な作品にも、フォーマットというものがあります。恋川春町『金々先生栄花夢』は、江戸時代後期(安永四年、1775)に作られた絵本です。そのころ絵本は「青本」と呼ばれ、子供向けの他愛ないものであったのですが、青本の形式はそのままに、内容だけ大人向けにし、そのギャップを面白がった画期的な作品です。そこでそれまでの「青本」と区別するために、大人向けの絵本のことを「黄表紙」と呼ぶようになりました。



図
1

平成 30 年 2 月 13 日 (火)

長塚さんは以前、『金々先生栄花夢』の主人公が夢を見ている冒頭場面(図1)²をご覧になり、作品を読みたいとのリクエストをいただいていたため、私からお話させていただくことになりました。

『金々先生栄花夢』は、一攫千金を夢見て田舎から江戸へやってきた金村屋金兵衛という若者が、豪商の養子となって贅沢の限りを尽

図
2



くすも、悪友の計略にはまり家を追い出されるという夢を見るというあらすじです。夢の中で大金持ちになった彼は、当初の田舎くさい身なりを改め、流行のファッションになるのですが、その成金具合が見もの。「金々先生」と呼ばれます。「きんきん」は、当時の流行語で「流行最先端」という意味。ちょっと小馬鹿にしたあだ名です。

吉原では悪い手代たちにおだてられ、紀伊国屋文左衛門のまねをして豆の代わりに小判をばらまくという場面がありますが(図2)、肝心の遊女は興味なさそうに横を向おり、金の力でモテようとする金々先生が野暮だということがわかります。遊郭での振る舞いの美意識を描いているのは、当時流行していた、吉原や深川などの江戸

² 請求記号： 99-132-1~2。貴重書。この場面は、山村浩二さんも

の色里を舞台に、当世流行の通意識のさまざまを描く「洒落本」というジャンルの小説を意識しています。洒落本は大人向けのお洒落な本ですから、それが青本のフォーマットの中に入っているのは当時大変面白がられたでしょう。

長塚さんは、こういったフォーマットを使いながらナンセンスなストーリーを描く黄表紙に興味を持たれた様子で、他の作品もご紹介することになりました。

また、以前から、「この本がここに来るまでの道のりが知りたい」と仰っていた長塚さん。黄表紙ははじめ、知識人達が内輪で楽しむ為に、身内ネタを沢山入れて作っていたものとお話ししたところ、それがどうして印刷され、一般の人にも読まれるようになったのかとご質問がありました。

明日も引き続き、教員からのレクチャーがありますが、様々な話題へ広がってゆくのが楽しみです。

注目されています。

